

公益と私益の相互媒介性

その理論的基礎付けと現実化への視座

谷 口 照 三*

Ⅰ．緒言 - 「公益と私益」の「問い方」の問題 -

「公益」が今問われている。それは、20世紀から21世紀へと時代が移る状況下のなかで問われている。すなわち、それは、前者と後者の社会のコントラストを鮮明にする役割を担っていると考えるがよい。「公益」についての話題が活発に取り上げられるようになった契機は、いくつか考えることが出来る。ここでは四つの契機を指摘しておこう。

20世紀においては、「公益は政府に、私益は市場に任せよう」ということを合い言葉に、後者の追求を原動力ないし「てこ」として社会の発展を目指そうとした時代であった。この効果は確かにあったが、21世紀が近くなるにつれてその問題性が顕在化した。それは通常「市場の失敗」や「政府の失敗」と表現されている。これらが第一と第二の契機である。前者の経験からは「私益追求における公益への配慮の必要性」が、後者の経験からは「公益とは何か、公益は誰が認定するのか」が問題提起されている。第三と第四の契機は、これらの失敗を背景に登場してくるのだが、それらはまったく逆の方向性を持っている。第三の契機は、いわば「繋がり感の喪失」という現象であり、そこからくる「公益に関する無関心さ」が一挙に道徳的危機感を浮上させた。第四の契機は、NPOやNGOの出現とその存在感の増大である。それは、「公益とは何か、公益は誰が認定するのか」の問題提起への応答として捉えることができる。NPOやNGOは、現実の生活の中で生活者としての立場から人々との繋がりを求めながら、真の社会や人々のニーズとは何かを探求し、その人々の「想いを形に」現していこうとしている。また、自分たちだけではなく、そこに企業や政府・行政を巻き込んでいこうとしているのである。

このような諸契機が「公益」を問い直す現在の状況をもたらしている。そこでの問いは、もはや「公益か私益か」あるいは「公益と私益の連動は可能かどうか」ではない。いまは、現実の生活の中で「公益と私益の相互媒介」ということが何を意味するのか、と問うことこそが中

* 桃山学院大学経営学部教授

心的な課題となっているように思われる。

かかる「相互媒介」を肯定的に捉えるならば、それは上向きの循環プロセスを描くことになる、と考えられる。以後これをスパイラル・アップ (spiral up)¹⁾と呼びたいと思う。このような「関係」として「公益と私益」を問おうとするその先には、「協働の促進が行為主体の発展を促し、行為主体の発展が協働の促進をさらに押し進める」というスパイラル・アップを現実化することへの期待が横たわっている、と考えて間違いはない。そこでは、行為主体の「責任の新しいあり方」が問われている、と私には思われる。ここで、私は、「公益と私益の相互媒介性」の意味を問い、かかる現実化に要請される「責任の新しいあり方とは何か」を明らかにしていきたいと考えている。

Ⅱ. 「公益と私益のコンパートメント化」とその背景

既に述べたように、20世紀という時代は、「公益は政府に、私益は市場に任せよう」ということが暗黙の了解事項であったのではないかと判断される。つまり、とりあえず「公益と私益は分断されていた」と言って良い。その思想的背景は、あるいはその理論的前提は何か。これを明らかにすることは、上述の課題へのアプローチにとって不可欠である。

ここで、このような背景、前提を巧みに表現しているアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの言葉を、少々長くなるが、引用してみよう²⁾。

中世の崩壊はその一つの側面においては、整序に対する反逆であった。新しい基調は、「競争」という語に表現されている。「なんじ、殺すなかれ、されど伝統はすべての形態の競争を是認する」。・・・どんな行為も私的な経験であるとともに公共的利益でもあるという考えが、ふたたび生まれてこなければならなかった。そういう考えは、「中世精神」の消滅とともに病死したのである。どこを見ても、人々は事物の表面に横書きされた「競争」という文字を読んだ。・・・競争で争われる賞は「生」であった。競争の落伍者は死んだ。こうして、彼ら落伍者は自然のすばらしい手配によって、社会問題になることもなかったのである。」

周知のように、アダム・スミスは、個人の私的利益の最大化と社会の利益は「正しく自由な競争」の媒介によって連動することを説いた³⁾。この仮説としての「正しく自由な競争」とは、「ルールに従った競争」であり、「発見的な手段としての競争」つまり「新しさ」を市場に導入する競争である。これは、生産者と消費者の双方の利益を増大することになる。しかし、現実

の競争は、経済学が想定した「発見的な手段としての競争」のみではなく、「ルールの抜け穴探しの、あるいはルール破りの競争」、「ゲーム化した競争」、「自己目的化した競争」が混在することとなった⁴⁾。「すべての形態の競争を是認する」ことが、現実となったのである。それは、「発見的な手段としての競争」以外の競争が増大すればするほど、特定の者が利益を得、多くの人々が損失を被るばかりでなく、やがては得する人など誰もいなくなる傾向が拡大することを、意味する。かくして、ここに、アダム・スミスの仮説は崩れることとなった。そこで、公益は政府が、私益は民間が担い、そしてそれぞれにおいて実現されたものの総和が社会全体の利益となる、との公式化が密かに導入され、再び「競争」が奨励されたように思われる。さらに、この公式化が「自然のすばらしい手配」となり、「競争の弊害」は「必要悪」として以外には、「社会問題になることもなかったのである」。

そこでは、「公益」が政治や行政の世界に閉じこめられ、人々が生活者として協働し公益を実現していく方向は公式的には閉ざされていた、と思われる。ここに、「閉ざされた公益の追求」と課題としての「開かれた公益の探求とその実現」とのコントラストを感じ取ってとっておくことは、重要であろう。他方、「私益」は、「自然のすばらしい手配」によって「自己利益の追求が社会的利益につながるかどうか」を自ら評価することから開放された自律的な個人や企業が自由に競争して実現するもの、とされた。ここに、「公益」と「私益」の、また諸個人のコンパートメン化、分節化、分断化を見ることが出来る。かくして、「どんな行為も私的な経験であるとともに公共的利益でもあるという考え」は「病死したのである」。

しかし、幸いなことに、20世紀の半ばが過ぎ、後半になるにつれて、ホワイトヘッドの予見どおり、その様な考え方が「ふたたび生まれて」くるようになった。その転機は、根本的には、人々の生活に根ざす「現実感の覚醒」にあるように思われる。人々は、孤立した個人として、また自己充足的に自分を捉えようとするところから、また環境を自己が働きかける対象としてのみ認識することから、少しずつ開放されてきたように思われる。人々は、セルフ・アイデンティティ (self-identity) の感覚を持ちつつ、人と人との間あるいは環境と人間との間に、「相互補完性」や「相互内在性」ないし「相互浸透性」を見て取ることが出来るようになった。このような人々の「現実感」は、「公益と私益の相互媒介性」を考える基礎となる。

Ⅲ．「公益と私益の相互媒介」に関するプロセス思想的基礎づけ

この新しい「現実感」を、私はアクチュアリズム (actualism) と呼びたい。ホワイトヘッドによって示されたプロセス思考は、アクチュアリズムと言ってよいと思う。「公益と私益の相互媒介性」を理論的に基礎づけるために、ここで、このアクチュアリズムについて考えてお

きたい。ホワイトヘッドの著書は、*Process and Reality* (The Macmillan Company, 1929) である。この表題は、アクチュアリズムをイメージするのに非常に便利であるように思う。つまり、アクチュアリズムとは、リアリティをプロセスにおいて捉える立場であるように思われる。プロセスから切り離されたリアリティは、単なるリアリティであり、アクチュアリティではない。ホワイトヘッドは、アクチュアリズムという言葉は使用していないと思うが、リアリティとアクチュアリティの関連と区別について述べることによって、実質的にアクチュアリズムの立場を表明しているとみてよい⁵⁾。この立場をより良く理解するために、彼の著書において最も基本的で核となる概念である「現実的存在」(actual entity) の特徴について、さらにみていこう⁶⁾。

「現実的存在」は、「世界を構成する究極的なリアルな事物 (final real things) である」が、それ自体「多くの可能的なもののリアルな合生 (real concrescence)」であり、「複合的で相互依存的な経験のしずく」である⁷⁾。かかる現実的存在が生成 (becoming) する過程は、現実世界 (actual world) と呼ばれる。この生成の過程には、ある現実的存在が他の現実的存在の生成に寄与する過程と、自己自身の生成に関わる過程がある。前者は、客体化の過程であり、後者は主体化の過程といつてよい。現実的存在は、客体化と主体化の統一過程のなかに「有る」のである。これらの説明に含意されている現実的存在の特徴は、以下の三点にまとめることができる。それは、「自己創造的被造物」(self-creating creature)⁸⁾、「自己超越的主体」(subject-superiect)⁹⁾、「客体的不滅性」(objective immortality)¹⁰⁾ であり、それらは「主体性の三つの意味」と言つてよいであろう。

「自己創造的被造物」とは、環境から造られつつも自らを造る存在 (entity) である。つまり、それは、他の現実的存在などの環境からの経験の多 (many) を一 (one) にする複合的な創発的統一性 (emergent unity) である。それは、諸関係の合生 (concrescence) である。ホワイトヘッドは、この関係性を合生へと向かわず働かないし様態を「関係性の具体的事実」として、「抱握」(prehension) および「感受」(feeling) と呼んでいる。この抱握は、被造物としての特性と自己創造の特性を媒介する。現実的存在は、その生成 (becoming) において環境からの経験の多、つまり「公共性」(publicity) が派生的に感受され、それが「観念的逆転」(conceptual reversion) によって、「個体的私性」(individual privacy) として直接感受し直された創発的統一性として、存在 (being) する。それは、被造物つまり「公共性」と自己創造つまり「個体的私性」の複合的統一性において、まさにアクチュアル (現実的) なのである。

「自己超越的主体」は、「自己創造的被造物」という特性からくる必然的な結果としての特性である。現実的存在が環境から造られつつも自己同一性 (self-identity) を失うことがないのは、「それ自身の決定に関して機能する」という自己作用 (self-functioning) によって、複合的統一性において「それ自身にとっての意義づけ (significance) を持つ」、つまり創発的統一

体になるからである。かかる「自己作用」は、「現実的存在のリアルな内的構造」であり、「その現実的存在の直接性(immediacy)」でもある。ホワイトヘッドは、「現実的存在は、それ自身の直接性の『主体』と呼ばれる」と言い、「主体」の意味について以下のように敷衍している¹¹⁾。「現実的存在は、経験しつつある主体であると同時に、その経験の自己超越体(the superject)である。それは自己超越的主体(subject-superject)であってこの記述のどちらの半分も、一瞬たりとも見失うことはできないのである。『主体』という言葉は、現実的存在がそれ自身のリアルな内的構造に関連して考察される場合に最も多く使用されるであろう。しかし、『主体』は、常に『自己超越的主体』の短縮形として解釈されるべきである」。

第三の「主体性の意味」は、「客体的不滅性」である。これは、ある現実的存在の生成の過程に含まれる「客体化」に係わる特性であり、またかかる現実的存在にとっての「公共性」ないし「公共的側面」である。「客体化」とは、「一つの現実的存在の可能性が他の現実的存在のうちに実現されるところの特殊な様態」を意味している¹²⁾。この客体化において、「現実的存在は、主体的には『絶えず消え去る』が客体的には不滅であり、「主体的直接性を喪失する一方、消滅することによって客体性を獲得」し、他の現実的存在の生成という創造性を特徴づける作用因となる¹³⁾。上述の自己超越的主体は、他の現実的存在の客体的不滅性のみならず、自己自身のそれを享受することによって、常に直前の自己を超え出ていき、その都度アクチュアライズされる。現実的存在は、客体的不滅性を得ることによって、他の現実的存在のなかに、また自らの将来、つまり未来においてアクチュアライズされるであろう自己超越的主体のなかに「生きる」のである。すべての現実的存在は、「創造的活動をつくり上げる上において客体的不滅性を等しく享受している客体である」¹⁴⁾。それは、種々の現実的存在の「相互内在性」(mutual immanence)を示唆する。ここに、現実的存在が他の現実的存在や自己の未来に対して「配慮」(care)したり、道徳的ないし倫理的に係わらずを得ない、根拠があるように思われる。

アクチュアリズムを正確に理解するためには、ホワイトヘッドが以上のような特性を持つ現実的存在のアクチュアライズされるプロセスを「非連続の連続」として捉えている、という点に留意する必要がある。かかるプロセスは、コントラストのあるもの間のスパイラルな(上向きの循環)プロセスである。私は、アクチュアリズムとは、人々や企業をも含めたあらゆる組織という行為主体の「生きる可能性」を、「生成」(becoming)と「存在」(being)、「公共性」(publicity)と「私的個性」(individual privacy)、「客体化」(objectification)と「主体化」(subjectification)、「主体」(subject)と「自己超越体」(superject)という、コントラストのあるもの間のスパイラル・アップの中に読みとっていくことである、と考えている。

Ⅳ. 「公益と私益の相互媒介の現実化」への社会的契機と視座

われわれが、このようなアクチュアリズムの視座に立つならば、「開かれた公益の探求とその実現」の可能性と「公益と私益の相互媒介性」を想像することは、それほど困難なこととは思えない。しかし、この相互媒介性の幅は、私益実現のための手段として公益に関わっていくこと、また公益実現のために私益実現の可能性を刺激として利用するということから、善意のみでなく「評価されたい」、「貢献したい」という動機のもとに、あるいは「社会的自己」(social self)や「エコロジカルな自己(ecological self)として公益の探求・実現に関わっていくということまでの範囲で、捉えておく必要があるように思われる¹⁵⁾。現実に期待されているのは、前者から後者へのスパイラル・アップである。それは、間瀬啓允が述べている行動を方向づける「価値のローカス(locus, 所在)」¹⁶⁾がこのスパイラル・アップによって変革されることを意味している。実は、現在、このような「価値のローカス」のスパイラル・アップを可能にするような事態が少しずつ進展している。それは、エンパワーメント(empowerment)¹⁷⁾とサブシディアリティ(subsidiarity)¹⁸⁾のスパイラル・アップである。

エンパワーメントは、最近企業やNPO・NGOでよく使われるようになった言葉の一つであるが、前者と後者ではその意味合いは異なっている。それは、前者においては上位のポストから下位のポストへの「権限付与」を、後者においては「力をつけること」を意味している。ここで、私がエンパワーメントという場合、後者の意味合いで使っている。前者の意味合いは、それを逆転する必要があるが、むしろサブシディアリティという言葉で表現しなければならない。それは、経営学ではあまり使われてこなかった言葉であるが、政治学や行政学の領域ではなじみのある言葉である。それは、「連邦主義(federalism)の中心にある思想」である。それは、元々権利とか権限などのパワーは一人ひとりの人間に属している、という考えが基礎にある。これまでの社会では、個々人のエンパワーメントが充分でなく、またそれらのパワーを行使する社会環境の整備が充分でないために、政府や組織の上層部にその多くを「逆委任(revers delegation)」していた。しかし、現代においては人々が確実に「力をつけてきた」ことや環境変化のために、政府や他の組織において意思決定と責任を出来るだけ市民や下位の人々に返還していこうとする傾向が徐々に鮮明になりつつある。そして、エンパワーメントとサブシディアリティのスパイラル・アップが現実化しつつある。そのことが「価値のローカス」のスパイラル・アップを促すことが出来るとするならば、「開かれた公益の探求とその実現」の可能性と「公益と私益の相互媒介性」の質的充実化の道が開かれるように思われる。

しかし、そのような展望が確実にアクチュアライズされるためには、個人や組織といった行為主体の具体的な努力が不可欠である。これまで述べてきたようなアクチュアリズムの視座に立つことは、そのための必要条件である。それは、いわば「構え」であり、それのみでは充分

ではない。上述の展望がアクチュアライズされるための充分条件は、その「構え」から展開されなければならない実践である。それはどのような実践か。この問題を「21世紀において希求される行為主体の習性」として、最後に検討してみよう¹⁹⁾。

これから行為主体に必要なのは、前述した種々のスパイラル・アップを可能とするような自己の現実的存在としてのスパイラル・アップを習性化することである。それは、単なる慣習ではなく、生き生きとした習性(vital habitude)である。ホワイトヘッドは、現実的存在を、その生成において環境からの経験の多、つまり「公共性」が派生的に感受され、それが「観念的逆転」によって「個体的私性」として直接感受し直された、創発的統一体として存在する、と捉えていると述べたが、これを日常の生活場面を想定し、解釈するならば以下のようになる。つまり、「何かを感受することによって意味を満たすことと創造的に何かを創り出すことによって意味を満たすこととの適切なバランス」を取ることが行為主体にとって大切なことである、と解釈できる²⁰⁾。このことは、「生き生きとした習性」の具体的内容を検討するための「手がかり」を与えてくれる。その手がかりとは、「ニーズに応答すること」である。

ニーズに応答するということは、いわゆる企業のみでなく、他の諸組織、さらに我々個人にとっても基本的な生活の営みそれ自体を意味する。そこに交互作用が生成し、企業や他の諸組織の存在意義が明確となり、そのことによって活動が可能となり、またわれわれ個人も意味のある生活を営むことができるのである。しかし、ここで注意深く確認しておくべき点は、ニーズへの対応は、「何か欠けている感じ」の「何か」を推定することから始められなければならない、ということである。ニーズ(needs)とは、何か欠けている感じ(欠乏感)であり、その「何か」は不確定のまま、曖昧さが残っている。「何か」が推定され、それが情報として、また具体的な財やサービスとして提示されることによって、「これが」欲しいという欲求(wants)が発生する。したがって、ニーズは「推定されるもの」であり、欲求は「創り出されるもの」である。「推定」には、「易しさ」もあれば「難しさ」もあり、また「正しいこと」もあれば「間違ふこと」もある。ニーズが推定しやすい場合は、その「正しさ」をもたらす易くなり、推定されたそれはほぼ欲求と重なり合う。「ニーズの一様性」は「ニーズの推定可能性」を高め、「ニーズの多様化・重層化」はそれを低める。それ故に、前者は「間違ふ」確率を低め、後者はそれを高めることになる。

20世紀にあつては、このニーズの推定が大変容易になし得たのであり、比較的それは射たものであつた。したがって、20世紀にあつては個人的にも、社会的にも果たすべき課題やその達成方法も比較的明確であつた。20世紀を特徴づける「大量生産・大量消費」や「資本規模、事業規模、及び組織の大規模化」は、基本的にはこの事実根ざしたものであつた。このような状況にあつたからこそ、企業は「規模の競争」と「会社固有の仕事のやり方による付加価値の創出」に焦点を当てること出来たと思われる。前者はアメリカ企業が、後者は日本企業が、

それぞれ得意とした戦略であった。また、「公益と私益のコンパートメント化」や「競争の奨励」を可能にしたのも、この点が大きく影響している。

しかし、21世紀においては、ニーズが推定しにくくなり、的はずれの推定になりかねない可能性も拡大するであろう。さらに、「ニーズの多様化・重層化」に伴って課題やその達成方法も多様化、複雑化すると思われる。このような状況にあっては、課題や達成方法の認識と共に、実践上の柔軟さが要請されることとなる。その為には、ひとり一人が、また多くの人々が協力して働くこと、つまり種々の協働を通して「感受性」と「応答能力」を豊かにすることが必要である。しかも、ニーズの特性及びニーズの多様化・重層化からもたらされる諸点を配慮するならば、21世紀においては、感受性には「深み」と「拡がり」を、応答能力には「強み」と「柔軟さ」が要請され、またそれらが促進されるような幅広い「新たな協働」が不可欠であろう。

「感受性」を豊かにするには、「想像力」(imagination)を要するし、「応答能力」の現実化には「創造力」(creativity)が不可欠である。それらの能力は、種々の幅広い協働を通して得られる可能性が高い。協働は、人々の諸能力を培う社会的な「場」である。そして、それは、それらばかりでなく、人々の行動の拠り所である「信念」の形成にも大きく寄与する。ここに、協働の「場」を基礎に、「信念」から「感受性」へ、「感受性」から「応答能力」へ、「応答能力」から「信念」へのリズムミクな移行を思い描くことが出来よう。最後の移行は、「ニーズに応じた諸課題の設定とそれらの実践」が「信念」から見て適合的であったかどうか、またかかる実践や協働の経験から見て「信念」を維持すべきか、または修正すべきかの評価の問題である。それは「自己批判能力の行使」と言ってもよい。したがって、この移行には、「自己超越力」(self-transcendence)が必要になる。「信念」から「感受性」への、「感受性」から「応答能力」への、また「応答能力」から「信念」への、それぞれの移行のリズムはそれぞれ「想像力」、「創造力」、「自己超越力」によって決定される。ホワイトヘッドは、「信念を批判することが「哲学すること」と言った²¹⁾。この最後の「自己超越力」は、哲学することによって、「信念」と「感受性」、そして「応答能力」間のスパイラル・アップを可能とする。より詳しく述べるならば、前述した「何かを感受することによって意味を満たすことと創造的に何かを創り出すことによって意味を満たすこととの適切なバランス」は、現実的には、このスパイラル・プロセスにおいて漸次的に形成されていくことが必要であるが、それを可能とするのが適切な「自己超越力」である。

このスパイラルを、私は、広い意味でのリスポンシビリティ・スパイラル (responsibility spiral) と呼びたい。その構成要素は、「想像的に何かを感受することによって意味を満たすこと」、「創造的に何かを創り出すことによって意味を満たすこと」、そして「自己超越的に自己を批判及び評価することによって意味を満たすこと」である。21世紀において希求されるであ

ろう「責任の新しいあり方」とは、この様なリスポンシビリティ・スパイラルを「生きること」ではなからうか。

V. 結言 - 「公益と私益の相互媒介性」を問うことの意味 -

21世紀はより潤いのある時代でなければならない。そのような時代は、「開かれた公益の探求とその実現」を可能とするような、また「公益と私益の相互媒介性」を大事なものとして受け止める社会を形成する必要がある。それは、「行為主体の発展」と「協働の推進」がスパイラル・アップするような社会と言ってよいであろう。それに向けてのプラットフォームの構築は、いまの我々にとって焦眉の急である。その為には、アクチュアリズムの視座に立ち、リスポンシビリティ・スパイラルを生きていくことを習性として意識的に形成していくことが、我々行為主体にとって必要とされていると思うのである。

以上のように、本稿においては、「公益と私益の相互媒介性」に関する理論的根拠とかかる相互媒介性の現実化への必要条件について検討してきた。それを通して、私は、個人であれ組織であれ行為主体として直面するあらゆる問題に対処するために最も重要な要因が個人や組織の自己省察力であり、自己と他者との相互関係の内面的基盤を探求する能力である²²⁾、ということを示してきたつもりである。「公益と私益の相互媒介性」を問うことの意味は、まさにここにある、と言ってよからう。

〔注〕

- ）本稿は、日本ホワイトヘッド・プロセス学会第24回全国大会（2002年10月26日～27日、東北公益文科大学）の際、開催された「一般公開フォーラム21＜公益＞（common good）を考える」（主催：日本ホワイトヘッド・プロセス学会、日本公益学会、共済：東北公益文科大学、後援：酒田市）での提題者としての報告をもとにしている。
- 1）この言葉は、本間日義氏（本田技研工業株式会社四輪事業部開発企画室技術主幹）が第27回全国経営学部長会議（2002年9月12日、作新学院大学）での特別講演「Fit開発の秘密 - HONDAの車創りの普遍性と固有性 - 」のなかで使われた。筆者もこれまで、上向きの循環過程に関することを"a spiral-shaped progress"や"the spiral process"、また"an upward rotating process"と表現してきた（以下の文献を参照されたい）が、本間氏の"spiral up"の方が簡素でかつインパクトがあるので借用させてもらった。
Teruso Taniguchi, "Environment-oriented Management and Philosophical, Ethical Innovation," 『桃山学院大学経済経営学論集』第35巻第3号, 1999年12月。Teruso Taniguchi, "Current Trends in Corporate of Japan: A Study of University Education and Research Topics," 『桃山学院大学総合研究所紀要』第27巻第3号, 2002年3月。
- 2）Whitehead, *Adventures of Ideas*, The macmillan Company, 1933. pp.31-32. ホワイトヘッド著作集第12巻, 山本誠作・菱木正晴共訳『観念の冒険』松籟社, 1982年, 41-42頁。
- 3）「公益と私益の相互媒介性」というテーマをより深く展開するためには、今回は出来なかったが、アダム・スミスについてより掘り下げた再考が必要かもしれない。いずれ手がけてみたいと思う。そのような刺激を与えてくれたのは、田中秀夫の『原点探訪 アダムスミスの足跡』（法律文化社, 2002年）である。
- 4）猪木武徳「発題 公私の問題と自発的な中間組織 - 公共の利益という視点から - 」, 『発題 を受けての討論』, 佐々木毅・金泰昌編『公共哲学6 経済からみた公私問題』東京大学出版会, 2002年, 1～37頁。参照。
- 5）この様な立場に立っていると類推しうる記述は、以下の箇所にみることが出来る。Cf. Whitehead, *Process and Reality*, p.10, p.63, pp.76-77, p.89, p.97. 平林康之訳『過程と実在』（ ）みすず書房, 1983年, 9頁, 57頁, 90-91頁, 107頁, 118頁。参照。Cf. Whitehead, *Adventures of Ideas*, The Macmillan Company, 1933. p.247, p.274. ホワイトヘッド著作集第12巻, 山本誠作・菱木正晴訳『観念の冒険』松籟社, 1982年, 340頁, 379頁。参照。また、この点についての筆者自身の解説を展開しているので以下の文献を参照されたい。谷口照三『有効性と能率性』概念の再吟味, 河野大機・吉原正彦編著『経営学パラダイムの探求』文眞堂, 2001年。さらに、このような考え方は、木村敏, 中村雄二郎, 野家啓一, およびジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) 等に見られる。以下の文献を参照されたい。木村敏稿「リアリティとアクチュアリティ」, 中村雄二郎・木村敏監修『講座 生命'97』第二巻, 哲学書房, 1997年。中村雄二郎・木村敏対談「共通感覚の可能性」, 野家啓一稿『『アクチュアリズム』の可能性』, 『講座 生命2000』第四巻, 河合文化研究所, 2000年。ジル・ドゥルーズ著, 財津理訳『差違と反復』河出書房新社, 1992年。
- 6）この点についての以下の四つのパラグラフは、谷口照三『有効性と能率性』概念の再吟味（河野大機・吉原正彦編著『経営学パラダイムの探求』文眞堂, 2001年）からの再録である。
- 7）Whitehead, *Process and Reality*, p.27, p.23. (訳書, 32頁, 26頁。)
- 8）Cf. *Ibid.*, pp.27-31. 訳書, 31-37頁。参照。
- 9）Cf. *Ibid.*, pp.30-31, p.33-34, p.58-59. 訳書, 36-37頁, 40頁, 42-43頁, 65頁。参照。
- 10）Cf. *Ibid.*, p.34, p.37, pp.58-59. 訳書, 43頁, 46頁, 65頁。参照。
- 11）*Ibid.*, p.34. 訳書, 42頁。

- 12) *Ibid.*, p.28. 訳書, 33頁。
- 13) *Ibid.*, p.34. 訳書, 43頁。
- 14) *Ibid.*, p.71. 訳書, 83頁。
- 15) Cf. Mathews, F., *The Ecological Self*, Routledge, 1991.
- 16) 間瀬啓允 『生命倫理とエコロジー』 玉川大学出版部, 1998年, 27-29頁。参照。
- 17) クリスト・ノーデン- パワーズ著, 吉田新一郎・永堀宏美共訳 『エンパワーメントの鍵』 実務教育出版, 2000年 (Norden-Powers, Christo, *Awakening the Sprit of the Corporation*, 1994.) 参照。
- 18) Cf. Handy, Charles, *The Empty Raincoat: Making Sense of the Future*, Arrow Books, 1994, pp.115-128. チャールズ・ハンディ著, 小林薫訳 『パラドックスの時代』 ジャパンタイムス, 1995年, 189-208頁。参照。Cf., Handy, *The Hungry Spirit: Beyond Capitalism*, Hutchinson, 1997, p.248. チャールズ・ハンディ著, 埴岡健一訳 『もっといい会社, もっといい人生 - 新しい資本主義社会のかたち - 』 河出書房新社, 1998年, 251頁。参照。
- 19) 筆者がこの問題を最初に論じたのは, 2001年3月, 『経営倫理』(No.18, 経営倫理実践研究センター)に掲載された「21世紀に不可欠な習性について」においてである。また, 以下の文献においても発展的に展開している。Teruso Taniguchi, “Current Trends in Corporate of Japan: A Study of University Education and Research Topics,” 『桃山学院大学総合研究所紀要』第27巻第3号, 2002年3月。
- 20) ヴィクトール・E・フランクル著, 諸富祥彦監訳, 上嶋洋一・松岡世利子共訳 『<生きる意味>を求めて』 春秋社, 1999年 (Viktry E. Frankl, *The Unheard Cry for Meaning, Psychotherapy and Humanism*, Simon and Schuster, 1978.), 119-120頁。参照。
- 21) ホワイトヘッド著作集第8巻, 藤川吉美・市井三郎共訳 『理性の機能・象徴作用』 松籟社, 1982年, 174頁。参照。
- 22) Cf. Morris, Tom, *If Aristotle Ran General Motors: The New Soul of Business*, 1997.p.xii. トム・モリス著, 沢崎冬日訳 『アリストテレスがGMを経営したら 新しいビジネス・マインドの探求 』 ダイヤモンド社, 1998年, iv頁。参照。

The Interplay between Common and Individual Good

Teruso TANIGUCHI

The social concern about common good has been growing for the last several years. This problem has been especially noticeable during the transition from the 20th to the 21st century. Now, it appears that the consciousness of mankind has been raised to the notion that, as A.N. Whitehead said, "every action is at once a private experience and a public utility."

Thus, our consciousness must be inspired by our wishes, as C.I. Barnard said, "the expansion of cooperation and the development of the individual are mutually dependent realities."

The objective of this study is to consider the theory and requirements for the interplay that occurs between the common and individual good. Throughout this study, an attempt has been made to develop the idea concretely, as Tom Morris said, "the single most important fact for dealing with all the problems we now face in our lives is our ability to look within and examine the inner foundations of " our own practices and relationships.